

問 1 (ア)

あ：略地図 I は正距方位図法で、中心からの距離と方位が正しい。
→東京からローマを見ると北西

い：地球の反対側の求め方 緯度 ① 数値はそのまま ② 北緯・南緯を入れかえる
北緯40度⇔北緯30度

経度 ① 180度から経度を引く ② 東経・西経を入れかえる
西経150度⇔東経(180-150)度 = 東経30度

問 1 (イ)

見える化

	カサブランカ時間	日本時間
日本出発	②	← 6/26 22:00 ①
↓ 10h40m		
ドバイ着	③	
↓ 3h45m		
ドバイ出発	③	
↓ ④答え		
カサブランカ到着	6/27 11:45	

- ① 日本とカサブランカの時差を求める
- ② 日本を出発するときのカサブランカの時刻を求める
- ③ 日本からカサブランカに向かうまでの所要時間を②に加えていき、ドバイを出発する時刻を求める
- ④ カサブランカへ到着する時刻から③をひいて完成

① 日本とカサブランカの時差を求める

日本の経度 = 東経135度

カサブランカの経度 = 略地図 I (経線15度ごと)の直線 L = 0度

2 地点の経度差 = 135-0=135度

2 地点の時差 = 135÷15=9時間

②日本を出発するときのカサブランカの時刻を求める

東に位置する地点の方が時間が先であるので、カサブランカは日本よりも9時間遅れている(-9時間)

	カサブランカ時間	日本時間
日本出発	② 6/26 13:00	← 6/26 22:00
↓ 10h40m		① -9時間
ドバイ着	③	
↓ 3h45m		
ドバイ出発	③	
↓ ④答え		
カサブランカ到着	6/27 11:45	

③日本からカサブランカに向かうまでの所要時間を②に加えていき、ドバイを出発する時刻を求める

	カサブランカ時間	日本時間
日本出発	② 6/26 13:00	← 6/26 22:00
↓ 10h40m	↓ 10h40m	① -9時間
ドバイ着	③ 6/26 23:40	
↓ 3h45m	↓ 3h45m	
ドバイ出発	③ 6/27 3:25	
↓ ④答え		
カサブランカ到着	6/27 11:45	

④カサブランカへ到着する時刻から③をひいて完成

	カサブランカ時間	日本時間
日本出発	② 6/26 13:00	← 6/26 22:00
↓ 10h40m	↓ 10h40m	① -9時間
ドバイ着	③ 6/26 23:40	
↓ 3h45m	↓ 3h45m	
ドバイ出発	③ 6/27 3:25	
↓	↓ 8h20m	
カサブランカ到着	6/27 11:45	

$$\begin{array}{r}
 6/27 \ 11:45 \\
 - \ 6/27 \ 3:25 \\
 \hline
 8h20m
 \end{array}$$

④答え 8時間20分

問 1 (オ)

見える化

- ① グラフ I から読み取れる「傾向」 }
② グラフ II から「企業の動向」 } 賃金、新規設立、撤退・移転の 3 語を用いる
↓
③ まとめる ①と②に「関連性(つながり)」を持たせる

① グラフ I から読み取れる「傾向」
→ 中国の従業員賃金が上昇傾向にある

② グラフ II から読み取れる「企業の動向」
→ 中国に新規設立された日本企業は減り、中国から撤退・移転する日本企業は増えた
= 中国で新規設立された日本企業の数、中国から撤退・移転する日本企業の数を上回った

③ まとめる

答え 中国の従業員の賃金が増えたので、中国から撤退・移転する日本企業が、中国に新規設立する日本企業を上回るようになった。

問 4 (ア)

- 1 大正時代の文化。「職業婦人」と呼ばれる
- 2 倒幕に関わった有力な藩が、明治政府の中心になった藩閥政治の説明で、西南戦争との因果関係はない
- 3 軍部の発言力が強まったのは、1936年に起きた二・二六事件の後

問 4 (工)

シベリア出兵(1918)～満州事変(1931)までのできごと
→ 1 は1958年、2 は1930年 3 は1925年 4 は1933年

問 4 (カ)

日本人で初めてノーベル賞を受賞したのは1949年の湯川秀樹、したがって C の時期